

実践ノート

ユニバーサルデザインについて考えるための 看図アプローチ授業

—複式学級高学年児童を対象とした授業実践—

森岡達昭¹⁾

Morioka Tatsuki

キーワード：看図アプローチ・複式学級・ユニバーサルデザイン・ビジュアルテキスト・見方と考え方

I. はじめに

2025年12月23日(火)、全国看図アプローチ研究会より鹿内信善会長と石田ゆき氏が来校し研究会が行われた。当日は3,4校時に中学年対象(3年生1名,4年生1名)の授業を鹿内会長が行い,5校時に高学年対象(5年生5名,6年生1名)の授業を筆者が行った。放課後には,鹿内会長による看図アプローチに関わる研修と高学年実践の講評をいただいた。本稿は,上記のうち筆者の授業実践報告(総合的な学習~ユニバーサルデザインの理解~)である。

II. 研究の背景

II-1 螺湾小の研究と実践に至った経緯

足寄町立螺湾らわん小学校は,全校児童15名の小規模へき地校である。本校の2025年度の研究主題は「主体的に深く学ぶ児童の育成~『協働(協同)と創造』を生み出す授業の追求~」である。また,研究の仮説を「協同と創造を生み出す授業を開発し実践することにより,生きた知識を獲得し主体的に深く学ぶ子どもが育つだろう」とした。本実践は,この研究主題へ迫るためのツールとして看図アプローチが活用できないかと考え行ったものである。

II-2 本時の目標と先行研究との関連

本時の目標は「写真を手がかりにして,ユニバーサルデザインについての考えを深める」とした。ユニバーサルデザインの見方・考え方としては,鹿内(2015)が参考になる。鹿内(2015,p.129)では,点字ブロックの上に跨るように配置された木製ベンチ(写真1)が紹介されている。



写真1 (鹿内 2015 より)

この写真を撮影したまちでは,点字ブロックの扱われ方に気になる点が多い。不必要に迂回させるもの,断裂を起こしているもの等,それを必要とする人に対して不親切な事例があげられている(鹿内 2015,pp.62-70)。専門業者が工事を行わなければ解決できない問題もあるが,誰でもが解決できる問題もある。木製ベンチ(写真1)はベ

1) 足寄町立螺湾小学校

ンチを移動させるだけで問題を解決できる。自分の力で移動ができないにしても、まずはこのような事態に気づく「目」「見る力」を育成することが重要である。鹿内（2015）は次のように述べている。『『おかしき』を見つけられる『見る力』をもっと育てていかなければならないのではないのでしょうか。点字ブロック遮断ベンチのような光景を見たら『え!?!』と思わなければならないのです。『え!?!』と思える人を育てていかなければならないのです。（p.130）」とくに、子どもの頃からこのような意識をもてるよう指導していくことは、大切なことなのではないだろうか。本実践もそれを念頭に置いて実施した。

Ⅲ. 授業の実際

Ⅲ-1 変換のステップ

授業の冒頭、写真2が載ったプリントを児童に配付した。



写真2 撮影：森岡達昭

児童らは、「エレベーターだ」と言いながら画像を受け取り、周囲と「あ、わかった。〇〇にあるやつだ。」などと自発的に話し始めた。このことから、身近にあるエレベーターだと感じていることがわかる。配付後、次の問いと指示を伝える。

「どんなものが写っていますか、3つプリントに書きましょう。」

児童の考えは主に次であった。

かべ、ドア、エレベーター、車椅子マーク、手すり、ポルト 等々

個人思考の後、ラウンドロビンで発表させた。聞き手には、書いていないものがあれば自分のプリントに書き足すことを指示した。すると、発表者から「エレベーターのとびらに映り込んでいる木」という発言があった。それをきっかけに、反射して見えているものの発表が相次いだ。これは、授業者（筆者）が想定していない反応であった。これらの発言から、間接的に見えるものを利用して読み取るビジュアルテキストの活用も、アイデアとして有効かも知れないと感じた。

Ⅲ-2 要素関連づけのステップ^注

このステップの問いと指示は以下である。

「このエレベーター、どこにあるものだと思いますか。プリントに書きましょう。」

この問いに対して、児童らは自らの記憶を元に次のような考えを書いた。

町民センターの2階の吹き抜けの横のエレベーター、中学校、ネイパル、図書館、ホテル〇〇（町内にあるホテルの名前）等々

ラウンドロビンの後、「この前、ここに行ったことがあるね」ということを話すと、「〇〇（施設の名称）！」という反応があり、それが正解であることを伝えた。以前に訪れた場所であることを知った児童らは、一気に親近感を増したようだ。次に、写真3を配付した。



写真3 撮影：森岡達昭

これは、写真2の角度を変えて撮影したもので、前回提示した写真の右側に新たにパネルが見えている。この写真を配付してから次の問いを出す。

「さっきの写真とちがうところはありますか。」

この問いに対する考えも、個人でプリントに書いてから発表し合っていく。例えば次のような内容が共有された。

番号みたいのがある、数字の書いてあるボタンがある、手すりが伸びた 等々

III-3 外挿のステップ

発表後、児童の発表で出された中にあった、「数字の書いてあるボタン」に注目させる問いを出した。

「このボタンは何のためにあると思いますか。」

児童らからは次のようなユニークな考えが出されて盛り上がった。

電話番号のボタン、呼び出しボタン、非常用ボタン、エレベーターの数 等々

活発な発言が続く中、授業者が引き出したかった「パスワード」という考えが出された。改めて何のためかを問うと、「子どもが遊ばないように」という理由が出された。

ここで、授業者から次のような説明をする。

「私はここで働いていたことがあります。そのときからこのエレベーターはありました。このエレベーターは、足の不自由な人が使うためのエレベーターです。私がここで働いていたとき、足が不自由な人がいて、車椅子でエレベーターに乗るのを手伝うことが何度もありました。みんなが言うように、他の人が乗って遊ばないように、パスワードを入れないと動かないようになっています。」

比較のために他の施設のエレベーターの写真も見せる(写真掲載省略)。その施設のエレベーター付近にはパスワードを入れるボタンが見当たらないことを確認した。このとき、「へえ、ここにはないんだね」「大丈夫なのかな」のような声もあったが、話題が広がりすぎるので深入りはしなかった。そして、本実践でのねらいに迫るために、次の問いと指示を出した。

「この手すり、写真では途中から見えなくなっていますが、続きはどうなっていると思いますか。プリントに書きましょう。文でもいいですし、イラストにしてもいいです。」

図1～3は、児童が描いたイラストである。

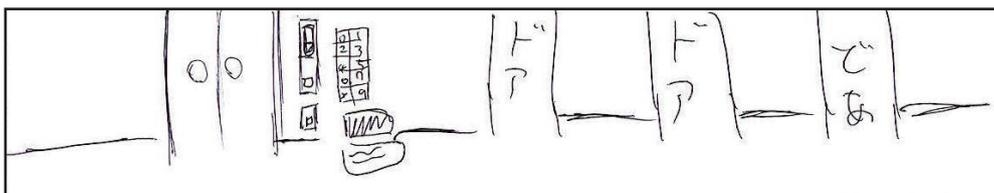


図1

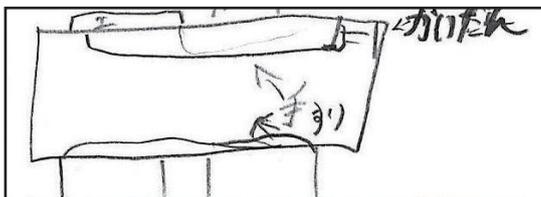


図2

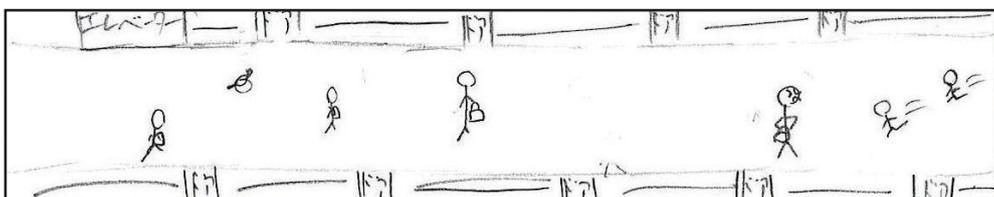


図3

個人思考の後で一人一人の机を児童全員が回り、その人のイラストを見たり考えを聴いたりする時間をとった。すると、どの児童もエレベーター横の手すりは廊下が終わるまで（50 m程度）ずっと続いていること、集会室のドアのところは途切れていることを予想していて、お互いに「そうだよね」「たしかに」と言いながら対話していた。イラスト化によって、他者の考えを具体的にイメージすることができていた。児童らは発表者の話に対して身を乗り出しながら聴く様子が見られた（写真4）。



写真4

説明が一通り終わった後で、写真5を配付した。



写真5

撮影：森岡達昭

児童らは、手すりが集会室のドアのところまで途切れているのを見て、「やっぱり！」などと言っていた。そこで、視点をさらに広げるために次の問いを出した。

「この写真を見て、『変だ、おかしい』と感じるところはありませんか。」

児童らは個人の考えをプリントに書き、ラウンドロビンで共有した。以下は児童の考えである。

- ◆ 手すりがふさがれている。
- ◆ つくえの上に手すり。
- ◆ つくえがじゃま。
- ◆ つくえがあつたらつかえない。
- ◆ テーブルがじゃまになっている。
- ◆ 手すりがあるのにテーブルがある。奥にもテーブルがあるから、不自由な人が行けなくなつて手すりの意味がなくなる。エレベーターにたどり着けなくなる。

全体で共有した後、「確かにこれだと困るね」という話になった。そこで筆者は「私がここにいた頃は、足が不自由な人がいたから、このような長机は置いていませんでした。今も不自由な人はいるのでしょうか。」となげかけた。そして、少し前まで写真（2・3・5）の施設に勤務していた方（参観者）にその場で確認した。すると、「今はない」という回答であった。児童らはその答えに安心したようだったが、「足が不自由な人が来たときのために改善する必要があるかも知れないね。」という話も児童から出された。ここで、チャイムが鳴った。

IV. まとめ

本実践では、写真を見ることを通して想像を膨らませ、考えを言語化したりイラスト化したりすることによって、ユニバーサルデザインについて考えることができることを目的とした。写真5のような事例はこの施設だけでなく、公共の場でも見られることがある。例えば写真6のような状況である。



出典：石田ゆき 2017 授業資料より
写真6

写真6は北海道内の某駅構内である（撮影は2017年であるが、2025年時点でも同様の状態であることを石田が視認している）。ベンチに貼付されているプレートを見ると、「寄贈」されたものであることがわかる。せっかく贈られた善意がこのような活用されることは非常に残念なことである。子どもの頃からものの見方・考え方をみがき、誰もが「おかしなこと」に「え!」「おかしい」と気づくことができるようになることが望ましい。善意が正しく届き、有効活用される社会をつくることにつながるだろう。

これまで、児童がビジュアルテキストをじっくりと読み解く経験はほとんどなかった。しかし、本実践を行うと児童の読み解く力は筆者の予想よりもずっと高かった。鹿内（2015）は「発問されると、その答えを探すために学習者は写真を『よく見る』ようになります。（p.72）」と述べている。また、「見ればわかるものをいくら見せても、そこから協同学習はうまれてきません。ビジュアルテキストでも文章テキストでも、ある種の『わかりにくさ』を備えている必要があります。（p.60）」とも述べている。本実践で取り上げたような、十分な情報が与えられていないビジュアルテキストを提示し、思考のきっかけとなる問いを出すことが、児童の思考を活性化させ、対話へとつながっていくことが確認できた。

石田（2025）はビジュアルテキストの読解活動を取り入れることのメリットについて次のように指摘している。「話をするきっかけづくりになる、想像力が働く・広がる、有意義な時間になる、軽く緊張がほぐれる、読み取る・汲み取る能力の養い方を学べる、自分では見えない答えが見つかる、知識が増える、無数の価値観に出会える、認め合うことの重要さに気づける、考え方を学べる。（p.49）」これらはすべて、看図アプローチ基盤型授業を受けた学生の発言からまとめられたものである。各授業の目標設定によってはさらに多様なメリット・効果が生まれる可能性がある。ただし、「目標」を事前にアナウンスしないほうが多様な意見が飛び交い、深い学びにつながることもある。鹿内（鹿内・石田 2025）は「目標を事前に呈示しない方が生き生きとした学びが生まれる授業もあるのです。／特定の目標を事前に呈示されると、学習者はその目標に直接関連した情報に特に注意を払って学習材料を読んでいます。／このような学習の仕方は『木を見て森を見ず』状態を引き起こします。その結果、学習材料の全体的な理解は阻害されることとなります。（鹿内・石田 2025,p.70）」本実践で、もしも事前に「これからユニバーサルデザインについて勉強します」「ユニバーサルデザインって聞いたことある？」などと伝えていたら、「足が不自由な人が来たときのために改善する必要があるかも知れないね。」のように児童自らが問題を見つけ改善策を出すような展開にはならなかったのではないだろうか。このような意見が自然に引き出されていたことは大変望ましい結果といえる。事前に目標を提示していたら、今回のように活発で多様な意見が飛び交うような読解活動・話し合いにはつながらなかったのではないかと筆者は考える。児童らが「授業者が求めている答えを探す」ことにとらわれず、核心に迫ろうとしながらものびのびと授業に参加していた様子が印象的であった。

今後も、ビジュアルテキストの有効活用を通し

て見る力を高め、対話し、新たな知見を創造できるような楽しい授業を創りたい。また、今後は対話で終わらずに、書くことにもつながる授業実践をしたい。

引用・参考文献および参考資料

石田ゆき 2017 専門学校日本福祉リハビリテーション学院（現：日本医療大学）「教育心理学」第11回目授業「新しい学力観」授業資料スライド

石田ゆき 2025 『看図アプローチのための教材デザインー「見ること」でととのう学びの아트モスフィアー』 トリアーデ | TRIADE

美馬良哉・石田ゆき・森寛・兒玉重嘉 2021 「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた『書くこと』の授業に関する予備的考察ー『看図作文』授業の検討を通してー」『全国看図アプローチ研究会研究誌』6号 pp.30-45

鹿内信善 2015 『改訂増補 協同学習ツールのつくり方いかし方ー看図アプローチで育てる学びの力ー』 ナカニシヤ出版

鹿内信善・石田ゆき（共編著）2025 『見方・考え方を育てる授業デザインー看図アプローチの理論と実践ー』 トリアーデ | TRIADE

編集委員会注

「Ⅲー2 要素関連づけのステップ」では「エレベーターはどこにあるものか」「2枚の写真で違っているところは」という2つの問いをなげかけている。この2つの問いはいずれも、写真に写っている「もの」を関連づける作業と、そこから発展的に考える作業が複合的に行われている。つまり要素関連づけだけでなく外挿の要素も含まれている。線引きが難しいところではあるが、2つの問いは要素関連づけが基本になることと、外挿のステップとするには少し低次の活動であると判断し編集・構成した。

2026年1月6日 受付

2026年1月9日 受理